複素数と Mathematica

桂田 祐史

2015 年 9 月 28 日, 2022 年 9 月 7 日

http://nalab.mind.meiji.ac.jp/~mk/complex/mathematica-memo/

色々なことをコンピューターが計算してくれる時代になった。私は、研究上で現れる問題はもちろん、授業とか入試問題の解答の確認をするためにも、日常的にコンピューターを使っている。ゼミでも積極的にコンピューターを活用するように言っている。期末試験などでは、コンピューター持ち込み禁止としてあって、それは急には変えられないだろうが、宿題等では活用するように言ってある。

(2020 年度は、COVID19 の流行のため、期末試験がレポートに置き換わって、コンピューター利用が役立つ状況になったはずだが、活用しなかった人が多かったのは残念だった。)

実際にはコンピューターで計算するにしてもコンピューターを使いこなすには、きちんと使いこなすための準備が必要である。

本音を言うと、必要性をこちらが説く前に、自分から興味を持って取り組んでもらいたいところ。

Mathematica のバージョンによって挙動が違うことがあるので、バージョンを添えて結果も載せた方が良いのかもしれない。

(2020/1/19) 学生で「Wolfram Alpha[1] でやっています」という人もいる。確かに、ここに載っていることくらいは、Wolfram Alpha でもやってくれるみたいだ。

1 全般的な覚え書き

- 現象数理学科でライセンスを購入しているので、所属する学生は利用できる。毎年 4 月末日にライセンスの更新がある (更新できない場合は、池田先生か桂田に相談する)。
- アプリケーション・フォルダに `Mathematica.app` がある (私は Dock に追加しています)。
- (新しくプログラムを作る場合) Mathematica を起動後、「新規ドキュメント」でノートブックを開き、コマンドを入力して実行する。
- コマンドの最後に shift + return (enter) とタイプする。
- 直前の結果は `%` で参照できる。直前のコマンドは command +L で呼び出せる。
- コマンドは編集して再実行できる (挿入、上書き修正、削除、などが可能)。
- ??関数名 としてマニュアルが開ける (非常に便利。これに慣れること。)。

[1] https://www.wolframalpha.com/

- 関数名の大文字・小文字に注意する。ほぼ例外なく、先頭は大文字である。
- ノートブックとして保存しておける (ファイル名末尾 `.nb`)。
- 既存のノートブックはダブルクリックで開ける。コマンドを 1 つ 1 つ $\boxed{\text{shift}}+\boxed{\text{return}}$ で実行する以外に、[評価] → [ノートブックを評価] で順番に全部実行することもできる。

2 四則など簡単な演算

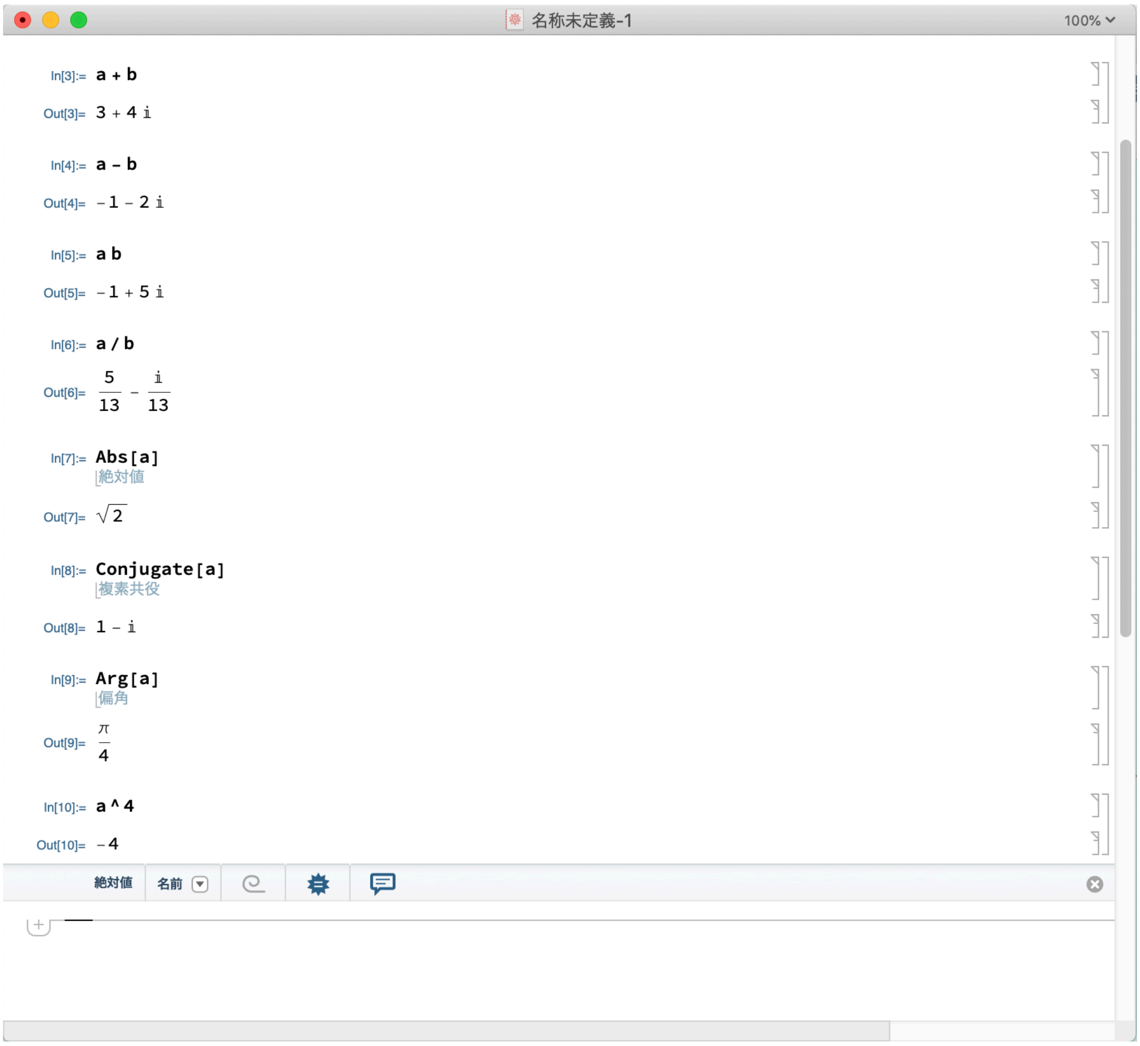
虚数単位は `I` (大文字) で表す。絶対値 (absolute value) は `Abs[]`, 偏角 (argument) の主値は `Arg[]`, 共役複素数 (complex conjugate) は `Conjugate[]` で計算できる。

2015 年度問 1[2] (1) の検算に使ってみる。

```
a=1+I
b=2+3I
a+b
a-b
a b
a/b
Abs[a]
Conjugate[a]
Arg[a]
a^4
```

注意 `a b` は `a*b` (`a` と `b` の積) を意味する。空白を省略して `ab` とすると、1 つの名前になってしまう。省略せずに `a*b` と書く方が混乱しにくいかも。

[2] http://nalab.mind.meiji.ac.jp/~mk/lecture/complex-function-2015/toi1.pdf


名称未定義-1
100%
In[3]:= a + b
Out[3]= 3 + 4 i
In[4]:= a - b
Out[4]= -1 - 2 i
In[5]:= a b
Out[5]= -1 + 5 i
In[6]:= a / b
Out[6]= 5/13 - i/13
In[7]:= Abs[a]
絶対値
Out[7]= √2
In[8]:= Conjugate[a]
複素共役
Out[8]= 1 - i
In[9]:= Arg[a]
偏角
Out[9]= π/4
In[10]:= a ^ 4
Out[10]= -4
絶対値
名前

3 平方根の計算

$c = a + ib$ $(a, b \in \mathbb{R})$ が与えられた時に、$z^2 = c$ の解を $z = x + iy$ $(x, y \in \mathbb{R})$ の形で求めることが出来る。

(複素数の平方根が、実数の $\sqrt{\ }$ で表現できる、という定理に基づく。)

$(x + iy)^2 = a + ib$ より連立方程式

$$x^2 - y^2 = a, \quad 2xy = b$$

が得られるので、その実数の範囲の解を求めれば良い。

$1 + i$ の平方根を求めてみよう。

```
a=1
b=1
sol=Solve[{x^2-y^2==a,2 x y==b},{x,y},Reals]
FullSimplify[sol]

あるいは ToRadicals[sol]
```

以上は授業で説明したやり方に沿って Mathematica に仕事をさせるものだが、z の方程式のまま解かせることも出来る (Mathematica が内部で何をしているのかは謎だけど)。

```
sol=Solve[z^2 == 1 + I, z]
sol2=ComplexExpand[sol]
ToRadicals[sol2]
```

最初に $z^2 = 1 + i$ を解かせると $z = \pm\sqrt{1+i}$ となるが、`ComplexExpand[]` で実部・虚部に展開させると、$z = \pm\sqrt[4]{2}\left(\cos\dfrac{\pi}{8} + i\sin\dfrac{\pi}{8}\right)$ となり、`ToRadicals[]` で処理すると、$z = \pm\left(\frac{\sqrt{2+\sqrt{2}}}{2^{3/4}} + i\frac{\sqrt{2-\sqrt{2}}}{2^{3/4}}\right)$ となる。

名称未定義-2 100%

In[11]:= `a = 1`

Out[11]= 1

In[12]:= `b = 1`

Out[12]= 1

In[13]:= `sol = Solve[{x^2 - y^2 == a, 2 x y == b}, {x, y}, Reals]`

解く 実数領域

Out[13]= $\{\{x \to -1.10\ldots,\ y \to -2\ (-1.10\ldots) + 2\ (-1.10\ldots)^3\},\ \{x \to 1.10\ldots,\ y \to -2\ (1.10\ldots) + 2\ (1.10\ldots)^3\}\}$

In[14]:= `ToRadicals[sol]`

根基で

Out[14]= $$\left\{\left\{x \to -\sqrt{\frac{1}{2}+\frac{1}{\sqrt{2}}},\ y \to 2\sqrt{\frac{1}{2}+\frac{1}{\sqrt{2}}} - 2\left(\frac{1}{2}+\frac{1}{\sqrt{2}}\right)^{3/2}\right\},\right.$$
$$\left.\left\{x \to \sqrt{\frac{1}{2}+\frac{1}{\sqrt{2}}},\ y \to -2\sqrt{\frac{1}{2}+\frac{1}{\sqrt{2}}} + 2\left(\frac{1}{2}+\frac{1}{\sqrt{2}}\right)^{3/2}\right\}\right\}$$

In[15]:= `FullSimplify[sol]`

完全に簡約

Out[15]= $$\left\{\left\{x \to -\sqrt{\frac{1}{2}+\frac{1}{\sqrt{2}}},\ y \to -\sqrt{-\frac{1}{2}+\frac{1}{\sqrt{2}}}\right\},\ \left\{x \to \sqrt{\frac{1}{2}+\frac{1}{\sqrt{2}}},\ y \to \sqrt{-\frac{1}{2}+\frac{1}{\sqrt{2}}}\right\}\right\}$$

In[16]:= `sol = Solve[z^2 == 1 + I, z]`

解く 虚数単

Out[16]= $\{\{z \to -\sqrt{1+i}\},\ \{z \to \sqrt{1+i}\}\}$

In[17]:= `sol2 = ComplexExpand[sol]`

式の展開

Out[17]= $$\left\{\left\{z \to -2^{1/4}\,\mathrm{Cos}\left[\frac{\pi}{8}\right] - i\,2^{1/4}\,\mathrm{Sin}\left[\frac{\pi}{8}\right]\right\},\ \left\{z \to 2^{1/4}\,\mathrm{Cos}\left[\frac{\pi}{8}\right] + i\,2^{1/4}\,\mathrm{Sin}\left[\frac{\pi}{8}\right]\right\}\right\}$$

In[18]:= `ToRadicals[sol2]`

根基で

Out[18]= $$\left\{\left\{z \to -\frac{i\sqrt{2-\sqrt{2}}}{2^{3/4}} - \frac{\sqrt{2+\sqrt{2}}}{2^{3/4}}\right\},\ \left\{z \to \frac{i\sqrt{2-\sqrt{2}}}{2^{3/4}} + \frac{\sqrt{2+\sqrt{2}}}{2^{3/4}}\right\}\right\}$$

4　実部虚部への分解

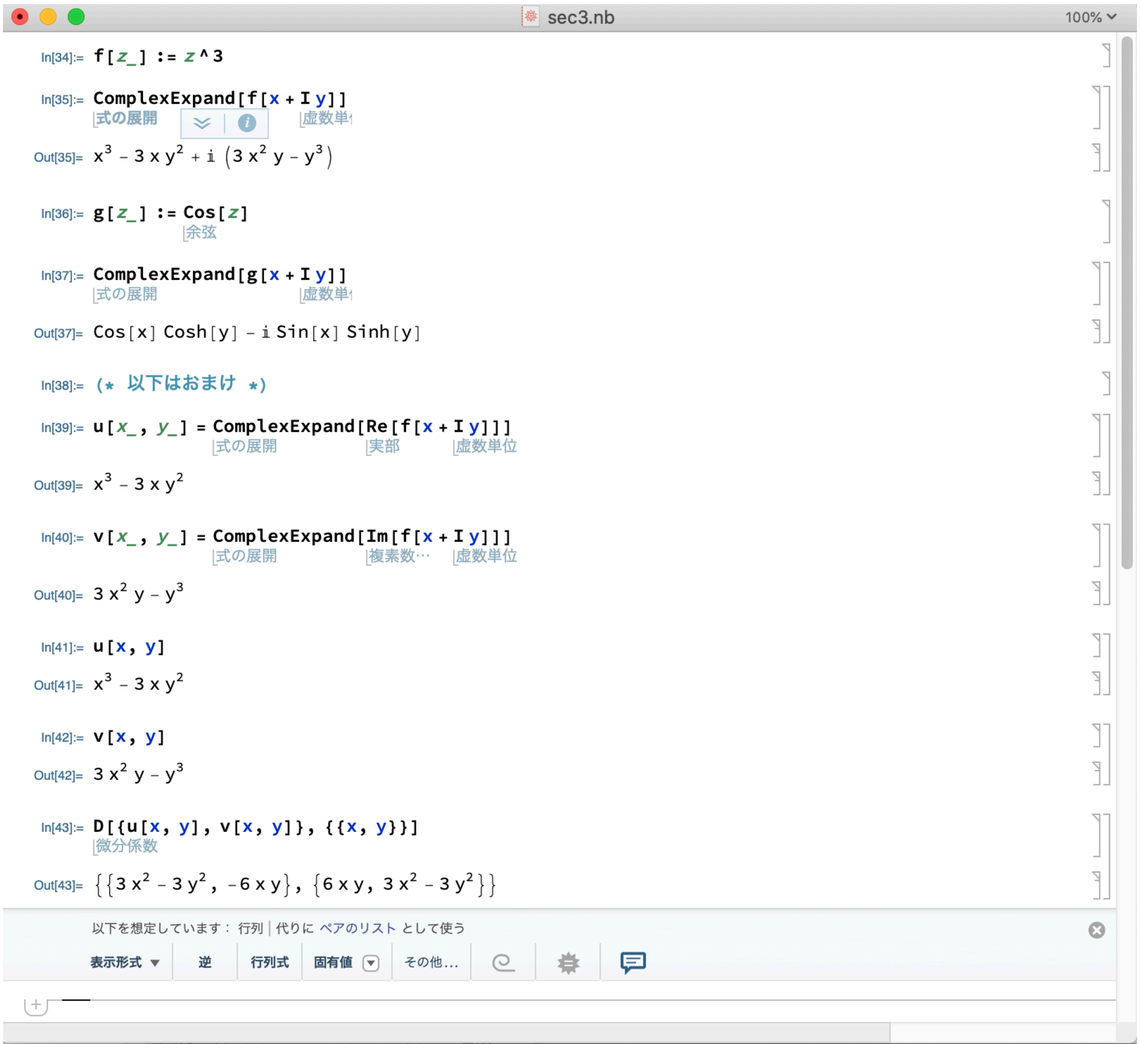
$\Omega \subset \mathbb{C}$, $f\colon \Omega \to \mathbb{C}$ とするとき、

$$u(x,y) := \operatorname{Re} f(x+iy), \quad v(x,y) := \operatorname{Im} f(x+iy) \quad \left((x,y) \in \widetilde{\Omega} := \left\{(x,y) \in \mathbb{R}^2 \mid x+iy \in \Omega\right\}\right)$$

で定めた u, v (複素関数 f の実部・虚部) が必要になる場合がある。

これらを求めるには、既に紹介した ComplexExpand[] を用いると良い。

```
f[z_]:=z^3
ComplexExpand[f[x+I y]]

g[z_]:=Cos[z]
ComplexExpand[g[x+I y]]
```

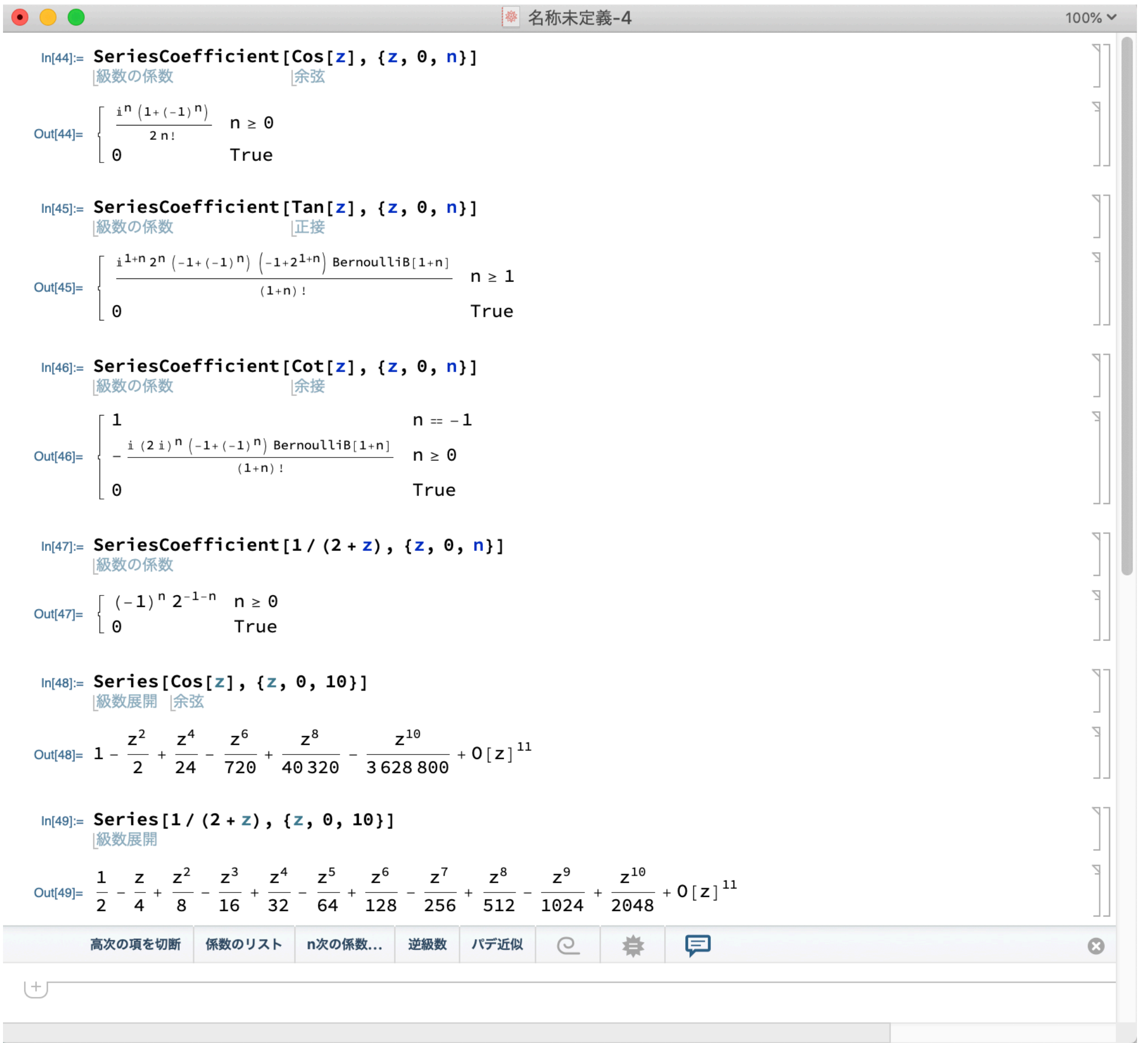


5 Taylor 展開, Laurent 展開

SeriesCoefffient[式, z,c,n] で、c のまわりの冪級数展開 $\sum_{n=0}^{\infty} a_n(z-c)^n$ や、c のまわりの Laurent 級数展開 $\sum_{n=-\infty}^{\infty} a_n(z-c)^n$ の第 n 項の係数 a_n を表示してくれる (とても便利)。

Series[式, {変数, c, n}] で、c のまわりの Taylor 展開を第 n 項まで計算出来る。

```
SeriesCoefficient[Cos[z],{z,0,n}]
SeriesCoefficient[Tan[z],{z,0,n}]
SeriesCoefficient[Cot[z],{z,0,n}]
SeriesCoefficient[1/(2+z),{z,0,n}]

Series[Cos[z],{z,0,10}]
Series[1/(2+z),{z,0,10}]
```



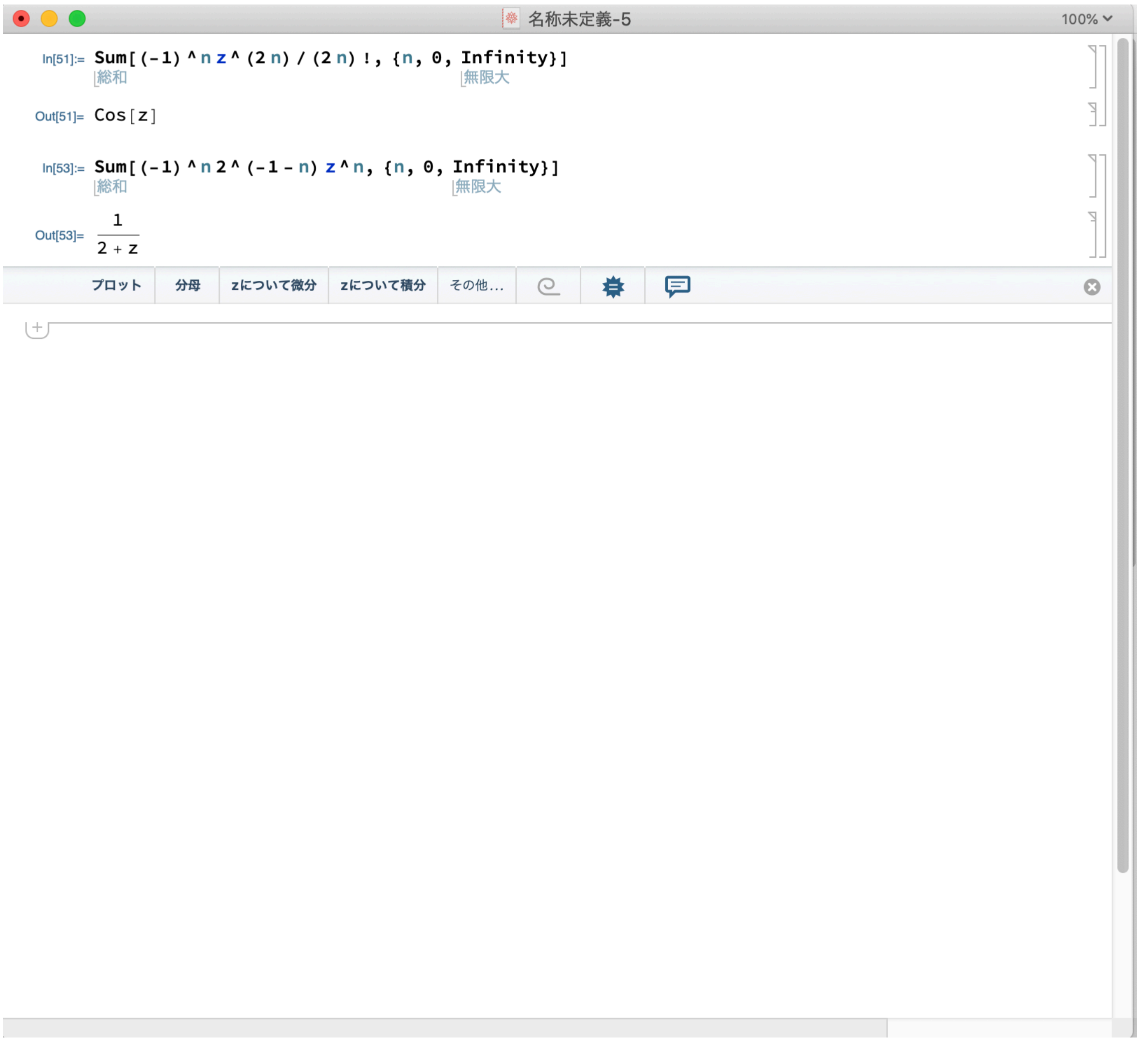
6 級数の和

Mathematica の Sum[] は級数の和を計算してくれる。思いの外、強力である。

```
Sum[(-1)^n z^(2n)/(2n)!,{n,0,Infinity}]
```

に対して Cos[z] という答を返す。

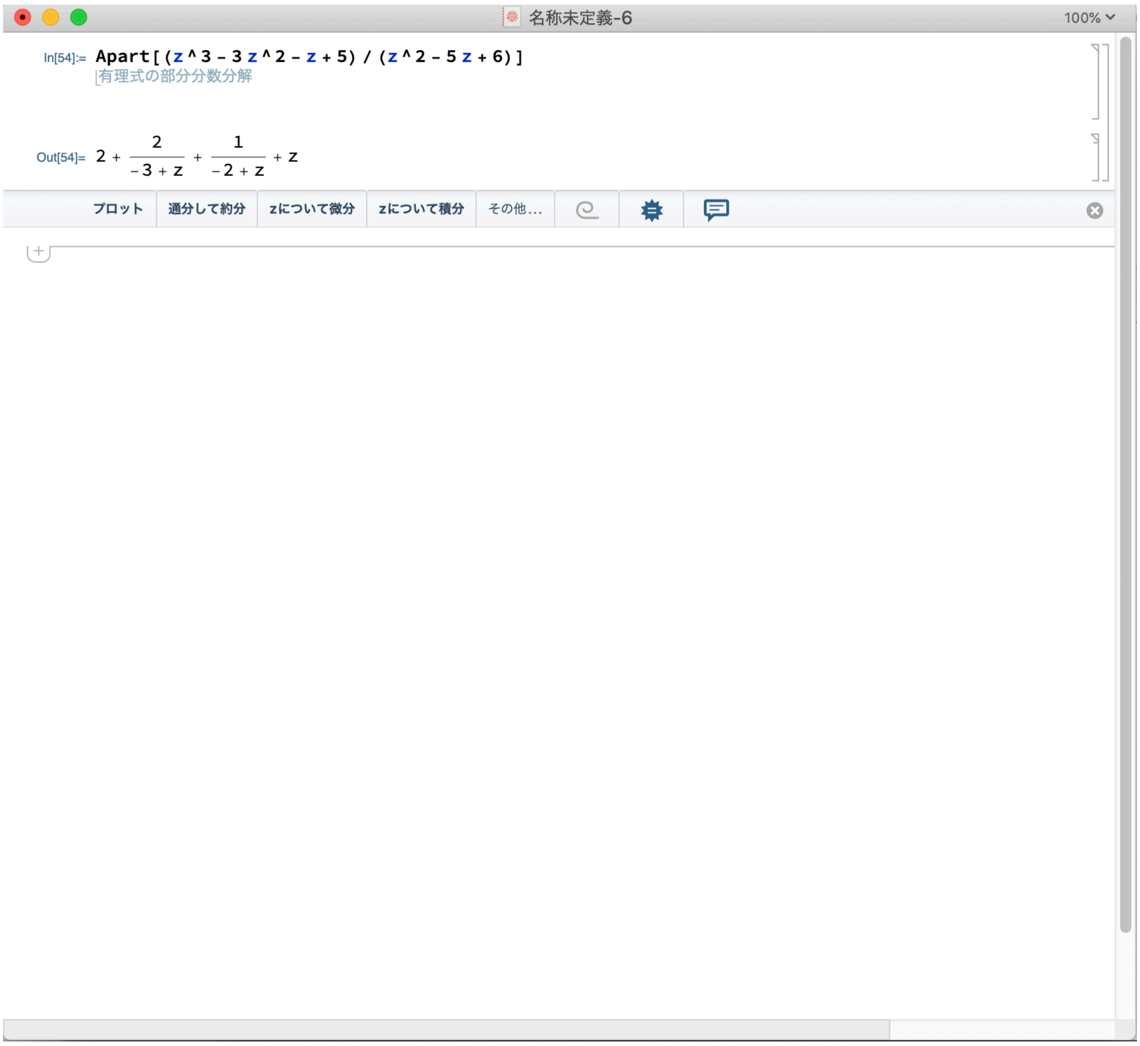
Taylor 展開、Laurent 展開を計算したとき、その結果を Sum[] に与えることで検算が可能である。



7　部分分数分解

有理式の部分分数への分解が必要になる場合があるが、Apart[] で計算できる。

```
Apart[(z^3-3z^2-z+5)/(z^2-5z+6)]
```



8 応用: ある計算問題 (有理関数の Taylor 展開を求める) の答の検算

$$f(z)=\frac{z^3-3z^2-z+5}{z^2-5z+6}.$$

の 0 の周りの Taylor 展開を求めよ、という問題。

人手で解く場合は、まず $f(z)$ を部分分数に分解する。そのためには、z^3-3z^2-z+5 を z^2-5z+6 で割りたくなる。

```
A=z^3-3z^2-z+5
B=z^2-5z+6
f=A/B
q=PolynomialQuotient[A,B,z]
r=PolynomialRemainder[A,B,z]
```

実は商と剰余は一気に計算できることに気づいた (何かあるはず、と思っていたが)。

```
{q,r}=PolynomialQuotientRemainder[A,B,z]
```

これから商 $q=z+2$, 余り $r=3z-7$ が求まる (商は quotient, 余りは remainder. polynomial は多項式という意味)。ゆえに

$$f(z)=\frac{(z+2)(z^2-5z+6)+3z-7}{z^2-5z+6}=z+2+\frac{3z-7}{(z-2)(z-3)}.$$

この右辺を部分分数分解しても良いが、そもそも Mathematica にやらせるのならば、最初から $f(z)$ の部分分数分解を指示してもよい。

```
Apart[r/B]

Apart[f]
```

それぞれ $\dfrac{2}{-3+z}+\dfrac{1}{-2+z}$, $2+\dfrac{2}{-3+z}+\dfrac{1}{-2+z}+z$ となる。

結局

$$f(z)=z+2+\frac{1}{z-2}+\frac{2}{z-3}.$$

`Series[f,{z,0,10}]` とすると、0 の周りの Taylor 展開を 10 次の項まで求めることが出来る。

$$f(z)=\frac{5}{6}+\frac{19z}{36}-\frac{43}{216}z^2-\frac{113}{1296}z^3-\frac{307}{7776}z^4-\cdots(\text{途中省略})-\cdots-\frac{181243}{362797056}z^{10}+O(z^{11})$$

が得られる。series は級数という意味の英単語である。

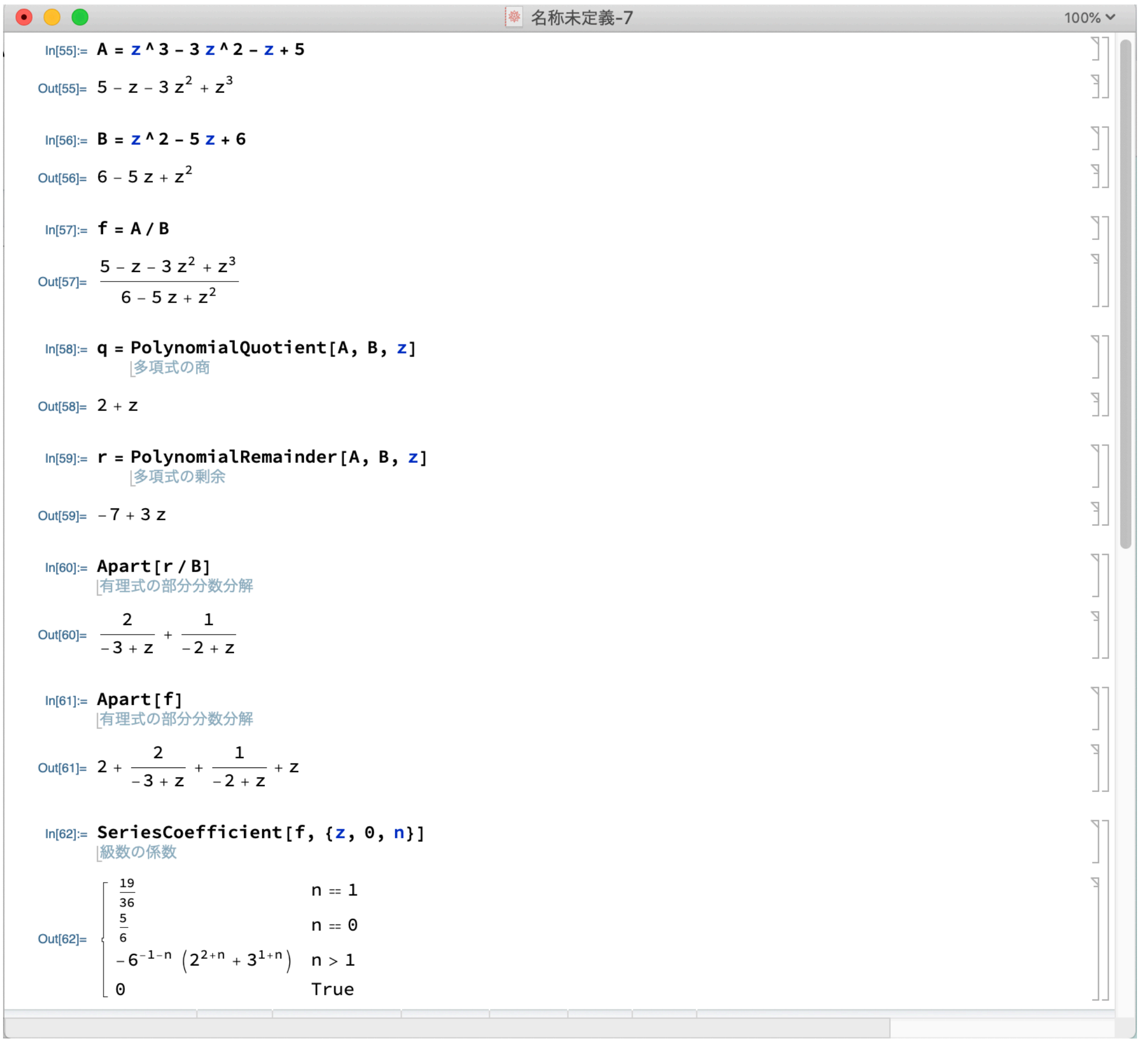
0 の周りの Taylor 展開の第 n 項は

```
SeriesCoefficient[f,{z,0,n}]
```

で求められる。

f の 0 の周りの Taylor 展開は

$$f(z)=\frac{5}{6}+\frac{19}{36}z-\sum_{n=2}^{\infty}\left(\frac{1}{2^{n+1}}+\frac{2}{3^{n+1}}\right)z^n.$$



Sum[] で検算が可能で、

```
5/6+19z/36-Sum[(1/2^(n+1)+2/3^(n+1))z^n,{n,2,Infinity}]
Simplify[%]
```

とすると、

$$\frac{5-z-3z^2+z^3}{6-5z+z^2}$$

が得られる。無事、$f(z)$ と一致したので、ほっと一息。

9　複素対数関数を描く

2 変数 (x, y) の関数としての $\operatorname{Im}\operatorname{Log}(x+iy)$, $\operatorname{Re}\operatorname{Log}(x+iy)$ のグラフを描いてみよう。

それぞれ $\operatorname{Arg}(x+iy)$, $\log\sqrt{x^2+y^2}$ であるから、コンピューターで図示しなくても分からなくはないが (図示しなくても分かるけれど)、やってみることを勧める。

Plot3D[] や ContourPlot[] では、描画範囲を x 座標と y 座標の範囲で指定するので、変数は x+I y と書くと良い (小さなノウハウ)。

Mathrmatica でグラフを描こう

```
Plot3D[Im[Log[x+I y]],{x,-2,2},{y,-2,2},
  RegionFunction->Function[{x,y,z},x^2+y^2<4]]
Plot3D[Re[Log[x+I y]],{x,-2,2},{y,-2,2},
  RegionFunction->Function[{x,y,z},x^2+y^2<4]]
```

RegionFunction[] は $x^2+y^2<4$ の範囲だけでグラフを描くための指定 (なくても描けるし、絞るのは趣味の問題)。

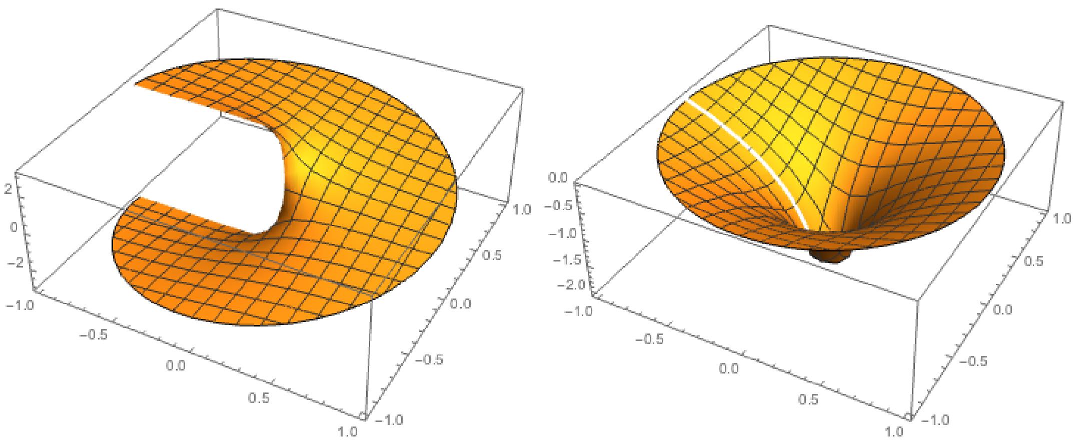


図 1: $\operatorname{Im}\operatorname{Log}(x+yi)$, $\operatorname{Re}\operatorname{Log}(x+yi)$ のグラフ

(以前は描画範囲を絞るため、RegionFunction を使うのではなく、Re[Log[x+I y]]Boole[x^2+y^2<4] のグラフを描いていた。)

Mathematica で描いたグラフは、マウスでつかんでグリグリ動かせる。ぜひやってみること (静止画を見るだけだと今ひとつ分かりにくい)。

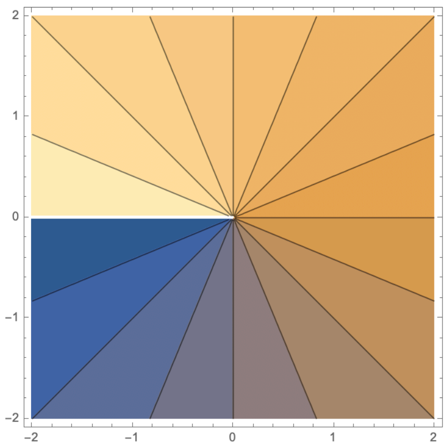
Plot3D[] の代わりに ContourPlot[] を用いると、レベル表示 (≒等高線描画) 出来る。

```
ContourPlot[Im[Log[x+I y]], {x,-2,2}, {y,-2,2}, Contours->Table[x,{x,-Pi,Pi,Pi/8}]]

ContourPlot[Re[Log[x+I y]],{x,-2,2},{y,-2,2}]
```

名称未定義-8

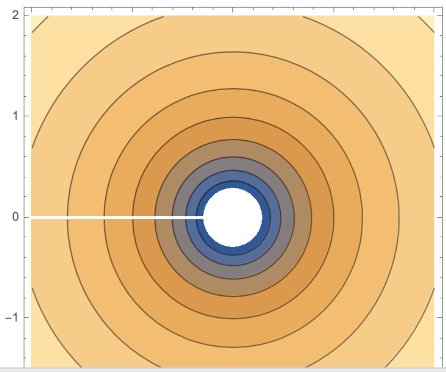
In[63]:=
```
g1 = ContourPlot[Im[Log[x + I y]], {x, -2, 2}, {y, -2, 2},
     等高線プロット   …  対数      虚数単位
  Contours → Table[x, {x, -Pi, Pi, Pi / 8}]]
  等高線       リストを作成       …   …   円周率
```

Out[63]=



In[64]:=
```
g2 = ContourPlot[Re[Log[x + I y]], {x, -2, 2}, {y, -2, 2}]
     等高線プロット   …  対数      虚数単位
```

Out[64]=



10　Abel の連続性定理に現れる収束範囲

冪級数 $\displaystyle\sum_{n=0}^{\infty} a_n(z-c)^n$ が収束円周上のある点 z_0 で収束するならば、その冪級数は “**Stolz の角領域**” で一様収束するので、和はそこで連続な関数である、というのが Abel の連続性定理で、それにより、

$$\frac{\pi}{4} = 1 - \frac{1}{3} + \frac{1}{5} - \cdots + \frac{(-1)^{n-1}}{2n-1} + \cdots$$

などの有名な結果が証明できる。

例えば $c=0$, $z_0=R$ の場合、

$$\Omega_K := \left\{ z \in \mathbb{C} \,\middle|\, |z| < R, \quad \frac{|1-z/R|}{1-|z|/R} < K \right\}$$

であるが、これは一体どういう形なのだろうか？

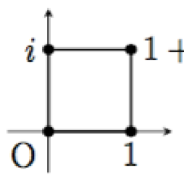
```
stolz[K_, R_] :=
 Block[{g1, g2},
  g1 = ContourPlot[x^2 + y^2 == R^2, {x, -2 R, 2 R}, {y, -2 R, 2 R}];
  g2 = RegionPlot[
    x^2 + y^2 < R^2 &&
     Abs[1 - (x + I y)/R]/(1 - Abs[x + I y]/R) <= K, {x, -2 R,
     2 R}, {y, -2 R, 2 R}]; Show[g1, g2]
 ]

R=1
Manipulate[stolz[K,R],{K,1,10,0.2}]
```

筆者は、Mathematica を使うまで、Ω_K がどういう形をしているか、実は良く分かっていなかった (そんなに難しくもないけれど、ちょっと考えて分かるものでもなくて、何となく気になってはいたけれど、放置していました。)。

11　線積分の験算

以下の線積分の値を求めよ。

(1) $C\colon z = t + it^2$ $(t \in [0,1])$ とするとき $I_1 = \displaystyle\int_C \mathrm{Re}\, z\ dz$　(2) $c \in \mathbb{C}$, $r > 0$, $n \in \mathbb{N}$, $C\colon z = c + re^{i\theta}$ $(\theta \in [0, 2\pi])$ とするとき $I_2 = \displaystyle\int_C \frac{dz}{(z-c)^n}$　(3) 0 から $1+i$ に至る線分を C とするとき $I_3 = \displaystyle\int_C \mathrm{Im}\, z\ dz$　(4) 単位円 $|z|=1$ の下半分を -1 から 1 までたどる曲線を C とするとき $I_4 = \displaystyle\int_C \overline{z}\ dz$　(5) 図の正方形の周を反時計回りに一周する曲線を C とするとき $I_5 = \displaystyle\int_C |z|\, dz$, $I_6 = \displaystyle\int_C \left(z^2 + 3z + 4\right) dz$



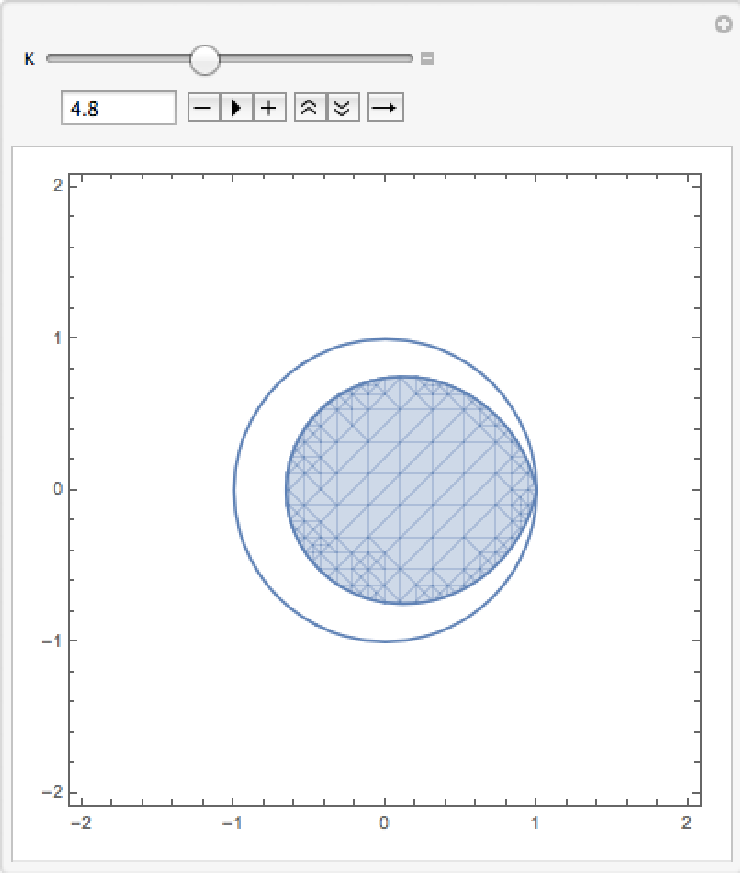


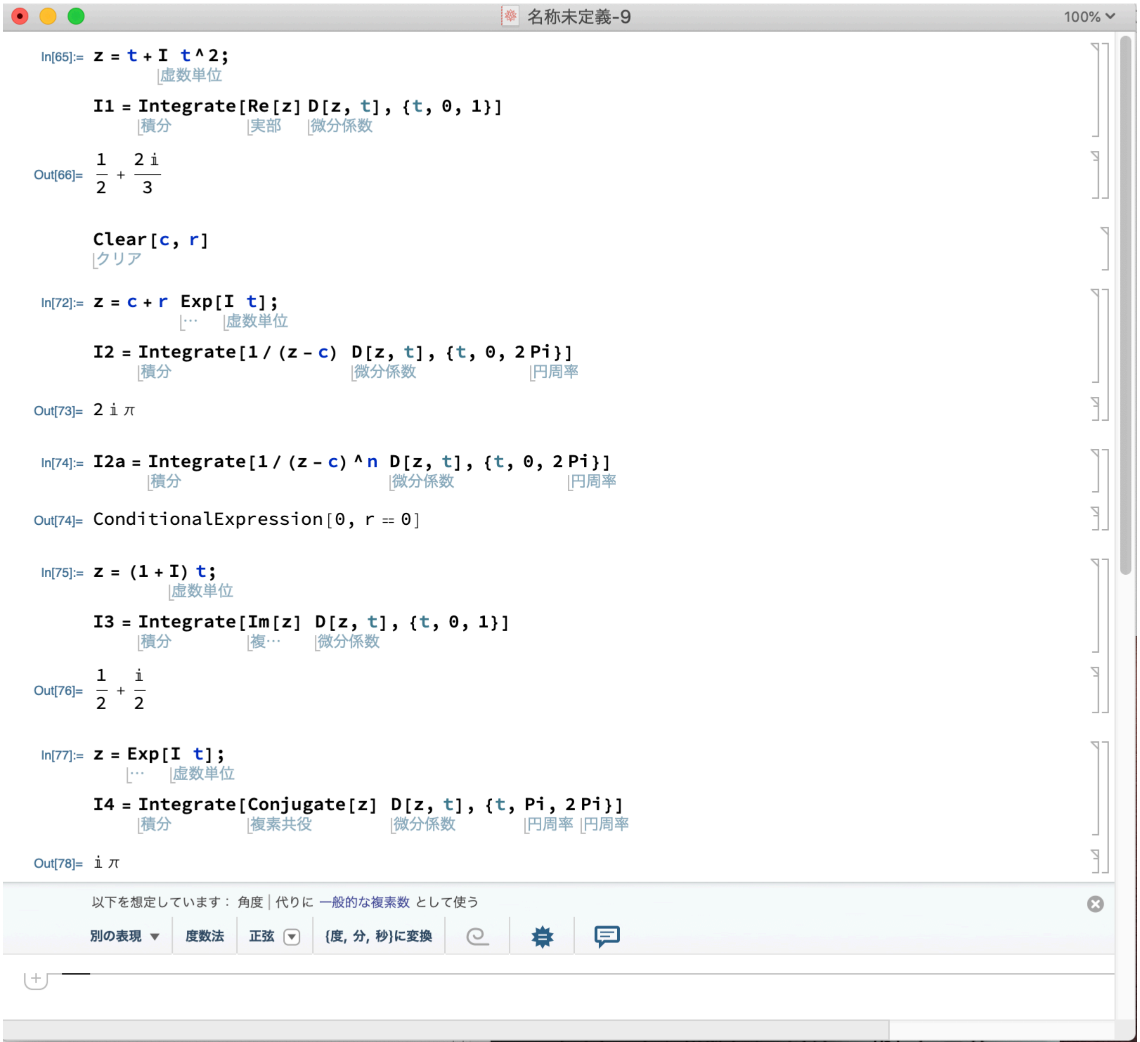
図 2: K を大きくすると膨れていきます

```
z=t+I t^2;
I1=Integrate[Re[z]D[z,t],{t,0,1}]

z=c+r Exp[I t];
I2=Integrate[1/(z-c) D[z,t],{t,0,2Pi}]
I2a=Integrate[1/(z-c)^n D[z,t],{t,0,2Pi}]

z=(1+I)t;
I3=Integrate[Im[z] D[z,t],{t,0,1}]

z=Exp[I t];
I4=Integrate[Conjugate[z] D[z,t],{t,Pi,2Pi}]

z1=t;
z2=1+I*t;
z3=1+I-t;
z4=I-I*t;
I5=Integrate[Abs[z1]D[z1,t],{t,0,1}]+Integrate[Abs[z2]D[z2,t],{t,0,1}]
 +Integrate[Abs[z3]D[z1,t],{t,0,1}]+Integrate[Abs[z4]D[z2,t],{t,0,1}]

f[z_] := z^2 + 3 z + 4
I6 = Integrate[f[z1] D[z1, t], {t, 0, 1}] +
  Integrate[f[z2] D[z2, t], {t, 0, 1}] +
  Integrate[f[z3] D[z3, t], {t, 0, 1}] +
  Integrate[f[z4] D[z4, t], {t, 0, 1}]
```

答は (1) $I_1 = \dfrac{1}{2} + \dfrac{2}{3}i$ (2) $n=1$ のとき $I_2 = 2\pi i$, $n \neq 1$ のとき $I_2 = 0$ (3) $I_3 = \dfrac{1+i}{2}$ (4) $I_4 = \pi i$ (5) $I_5 = \dfrac{i-1}{2}\left(\sqrt{2} - 1 + \log(1+\sqrt{2})\right)$ (6) $I_6 = 0$

Mathematica は、(5) の $\log(1+\sqrt{2})$ を `ArcSinh[1]` と表示する。`TrigToExp[]` を施すと log で表示してくれる。

```
In[ ]:= TrigToExp[ArcSinh[1]]
Out[ ]= Log[1+√2]
```



```
In[145]:= z1 = t;
          z2 = 1 + I * t;
          z3 = 1 + I - t;
          z4 = I - I * t;
          I5 = Integrate[Abs[z1] D[z1, t], {t, 0, 1}] + Integrate[Abs[z2] D[z2, t], {t, 0, 1}] +
            Integrate[Abs[z3] D[z1, t], {t, 0, 1}] + Integrate[Abs[z4] D[z2, t], {t, 0, 1}]
```

Out[149]= $\left(\frac{1}{2}+\frac{i}{2}\right)+\left(\frac{1}{2}+\frac{i}{2}\right)\left(\sqrt{2}+\text{ArcSinh}[1]\right)$

```
In[153]:= TrigToExp[I5]
```

Out[153]= $\left(\frac{1}{2}+\frac{i}{2}\right)+\frac{1+i}{\sqrt{2}}+\left(\frac{1}{2}+\frac{i}{2}\right)\text{Log}\left[1+\sqrt{2}\right]$

```
In[155]:= Clear[f]

In[156]:= f[z_] := z^2 + 3 z + 4

In[157]:= I6 = Integrate[f[z1] × D[z1, t], {t, 0, 1}] + Integrate[f[z2] × D[z2, t], {t, 0, 1}] +
            Integrate[f[z3] × D[z3, t], {t, 0, 1}] + Integrate[f[z4] × D[z4, t], {t, 0, 1}]

Out[157]= 0
```

12 曲線の連続的な変形 (ホモトピー)

円を楕円に変形する。

```
phi0[t_]:={Cos[t],Sin[t]};

phi1[t_]:={3Cos[t],2Sin[t]};

F[t_,u_]:=(1-u)phi0[t]+u*phi1[t];

Manipulate[ParametricPlot[{phi0[t], phi1[t], F[t, u]}, {t, 0, 2 Pi},
  PlotRange -> {{-3, 3}, {-3, 3}}], {u, 0, 1}]
```

`phi1[t_]:={1/2,0}` とすると、定数曲線で、像は $\{(1/2,0)\}$ であり、円周 $x^2+y^2=1$ を 1 点 $(1/2,0)$ に変形することになる。

以上は複素数を使っていないので、書き換えてみる。

```
Clear[phi0,phi1,F]
phi0[t_]:=Exp[I t];
phi1[t_]:=3Cos[t]+2 I Sin[t];
F[t_,u_]:=(1-u)phi0[t]+u*phi1[t];
z2xy[z_]:={Re[z],Im[z]}
Manipulate[ParametricPlot[{z2xy[phi0[t]],z2xy[phi1[t]],z2xy[F[t,u]]},
                          {t, 0, 2 Pi}, PlotRange -> {{-3, 3}, {-3, 3}}],
          {u, 0, 1}]
```

参考文献

[1]